

## マツの管理 1

マツは常緑の針葉高木で、庭園の主要部に植えられ、その美しい樹形や常緑葉を觀賞します。多く使用されているマツとしては、アカマツ、クロマツ、ゴヨウマツなどがあげられます。

## 種類・分布

- アカマツ** 樹皮は赤褐色で、葉が細いので女性的な樹型をしています。日当たりと排水のよいところを好み、品種にはタギョウショウ、ウツクシマツなどがあります。
- クロマツ** 樹皮は黒褐色で、葉も太く男性的な樹型をしています。大気汚染や潮害によく、土質も選ばれません。庭木や盆栽によく使われます。
- ゴヨウマツ** 黒っぽい灰色の樹皮で、短い五葉を束生します。排水のよい、やや乾燥ぎみの場所を好みます。生育は他のマツ類に比べるとおそいようですが、クロマツに準じて仕立てます。

## 栽培管理

## 植え付け

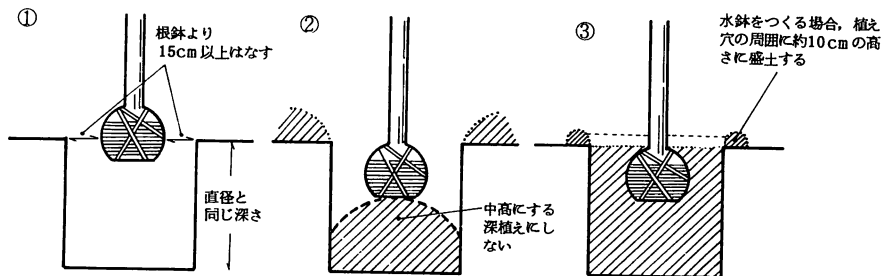
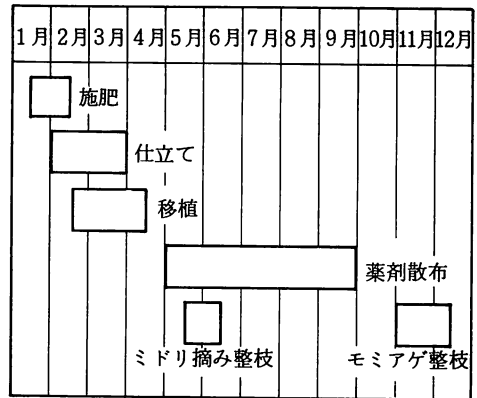
植え穴は深く大きく掘り、樹を浅く入れ、細かく砕いた土を棒で細根の間によく突き込みながら入れていきます。植え付け後にかん水し根元に敷きワラをして保護し、木が弱っている時はワラなどで幹巻きをし幹からの蒸散と日焼けを防ぎます。

小さな木を移植するときは根まわしの必要はありませんが、できるだけ根を傷つけないよう注意します。

## 施肥

小苗や老樹には多く施しますが、成木には寒肥として骨粉や草木灰を施す程度でよく、チッ素成分を多く施すと、かえって節間が伸び形がくずれてしまいます。

## マツの年間栽培管理



マツの植え付け

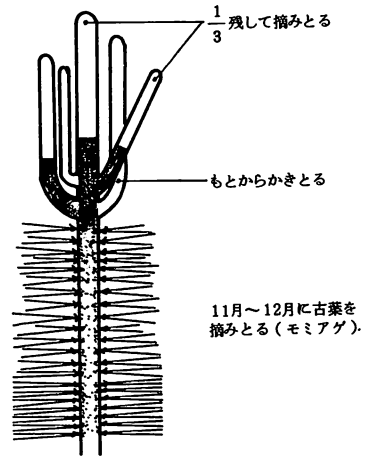


## マツの管理 2

## ミドリ (マツの新芽) 摘み

時期 5月下旬～6月

- 方法 ①主枝の伸びる方向に枝がなく太い枝がほしい場合、主芽のみ残しほかは摘みとります。
- ②芽の伸びる方向に枝が少ない場合、主枝はそのまま残し、枝の横への広がりを考えほかの芽を一部分摘みます。
- ③枝の量が多すぎる場合、主芽の先端を摘みほかの芽を全部摘みます。
- ④老木や樹勢の衰えているものは、全部の芽を残し、若木や樹勢の強いものは、芽を全部摘むこともあります。



ミドリ摘み

## 殖やし方

実生 秋に採種し翌春3月にまきます。

クロマツ、アカマツなどの二針葉種は、秋に球果を裂開前やや早めに採取し、天日乾燥します。種子は、乾燥剤を入れ密封低温貯蔵します。

ゴヨウマツなどの五針葉種は、乾燥を嫌います。多少湿り気のある川砂やオガクズの中で、5℃程度の低温に保ち貯蔵します。

接木 主に園芸品種の繁殖に用います。3月頃、台木に実生2～3年生のマツを使い、割接ぎ、腹接ぎで殖やします。

## 病虫害

## マツのおもな病気

病 気	症 状	防 除 法	備 考
葉ふるい病	春、葉に淡褐色の斑点が現われ、症状が進むと葉の一部または全体が褐色になり落葉する。	春から初秋に銅剤(ボルドー液など)を散回散布する。	
葉さび病	春、葉に初め黄色で後に白色の小膜状物が並列して形成され、そこから黄粉が飛び散る。	9月頃から月2～3回の割合でダイセンを散布する。	野生ギク、キハダなどが中間寄主となる。
こぶ病	枝や幹にこぶができる。1～2月頃こぶの裂け目からアメ状の粘液をだし、数ヶ月後に黄粉が飛び散る。	こぶを切り取り、切り口に石灰イオウ合剤の10倍液を塗り、後に接ぎロウなどで塗布し保護する。	ナラヤクスギなどが中間寄主となる。

## マツのおもな害虫

害 虫	被 害	防 除 法	備 考
マツクイムシ	カミキリムシ、ゾウムシなどが樹に穴をあけ、皮の下や樹の内部を食害する。	6～8月に産卵と食入を防ぐため樹幹にスミチオンを散布する。また虫糞の出ている穴にスミチオンを注入する。	衰弱した樹に多く発生するので、日ごろから肥培管理に心がけ健全に育成させる。
マツシンクイムシ	数種類のガの幼虫が新梢に食入する。	卵からかえった幼虫にスミチオンを散布する。新梢を重点的に行う。	6～8月に被害が多いが食入する時期が一定していないので薬散の効果はあまりあがらない。
マツケムシ	マツの針葉を食害する。大発生したときは葉を食い尽し樹皮まで食害する。	抵抗力の少ない9～10月あるいは、4～5月の若い幼虫期にディフテレックスを散布する。	10～11月頃ケムシが越冬場所を求めて移動するので、コモで幹巻きし2～3ヶ月後にそのコモを焼却する。